



No. 52 [平成 29 年 10 月 2 日]
岡山県総合教育センター
〒716-1241
加賀郡吉備中央町吉川 7545-11
TEL(代) (0866) 56-9101
特別支援教育部 TEL(0866) 56-9106
特別支援教育部相談専用電話
TEL(0866) 56-9117
<http://www.edu-ctr.pref.okayama.jp>

研修講座への御参加 ありがとうございます

5月から8月にかけて実施した特別支援教育に関する研修講座では、多数の先生方に参加していただきありがとうございました。学校現場の先生方からの価値ある実践発表には、多くの気づきや明日からのヒントがありました。今年度も、昨年度に引き続き、サテライト研修講座を実施したりアクティブな演習形式の研修内容を多く取り入れたりして、学校現場に少しでも生かしていただけるよう工夫を重ねています。

8月21日に開催されたキャリア教育就労支援充実研修講座（高特）では、平林金属株式会社を会場に、リサイクル作業の様子を見学し、就労支援コーディネーターによる実践発表や情報交換等を行いました。今年度は、高等学校の先生方も参加し、特別支援学校の先生方と生徒の就労について語り合う貴重な機会となりました。

10月には、教科教育部との合同開催となるサテライト研修講座があります。詳細は当センターのWebページから御覧下さい。



キャリア教育就労研修講座（高特）
（平林金属株式会社）
「リサイクル作業の見学」



合理的配慮・インクルーシブ教育
システム基礎研修講座
「明日からできることを考える」



肢体不自由 授業力アップ研修講座
「基本の姿勢についての演習」



訪問教育研修講座
「教材を持ち寄ってのワークショップ」

特別支援学校の授業づくりと学習評価の今後



平成29年4月28日告示の特別支援学校幼稚部教育要領、小学部・中学部学習指導要領の第1章総則において、今回新たに幼稚部には「指導計画の作成と幼児理解に基づいた評価」が、また、小学部・中学部には「教育課程の実施と学習評価」の規定が示されました。新学習指導要領における学習評価に関する幼稚部、小学部・中学部改訂のポイントは、次のようになります。

<幼稚部>

- ・ 相対評価によらず、個人内評価により丁寧に成長や発達を見取っていくこと
- ・ 評価の妥当性や信憑性が高められるような創意工夫を行い、次年度又は小学部、小学校等にその内容が適切に引き継がれるようにすること（引き継ぎ資料として活用されること）。

<小学部・中学部>

- ・ 児童又は生徒の良い点や可能性、進歩の状況などを積極的に評価し、学習したことの意義や価値を実感できるようにすること。また、各評価等の目標の実現に向けた学習状況を評価する観点から、単元や題材など学習や時間のまとまりを見通しながら評価の場面や方法を工夫して、指導の改善や学習意欲の向上を図り、資質・能力の育成に生かすようにすること。

今回の改訂を遡ってみると、平成26年11月20日の文部科学大臣諮問の中では、教育目標・内容と学習・指導方法、学習評価の在り方を一体として捉えていこうとする新しい時代にふさわしい考え方が審議の柱として位置付けられました。また、それを受けて、平成28年12月21日の中教審答申で「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について」が示されました。国立特別支援教育総合研究所統括研究員 武富博文先生によると、そのポイントは、次の10点に集約できると提言されています。（「特別支援教育研究」2017 8 東洋館出版社）

- ① 目標に準拠した評価を実質化するために育成を目指す資質・能力の三つの柱と関連した「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の三観点から観点別学習状況の評価を進めること
- ② 育成を目指す資質・能力の三つの柱の中で「学びに向かう力・人間性等」については、感性や思いやり等の幅広いものを含んでいるため、それらは観点別学習状況の評価になじまず、個人内評価として見取る部分があること
- ③ 評価の観点として「関心・意欲・態度」を「主体的に学習に取り組む態度」に改めた背景には、児童生徒の性格や行動面の傾向が一時的に表出された場面を捉えるなどの誤解がみられることから、児童生徒が自らの目標を設定し、進め方を見直し、その過程を自己評価により新たな学習へつなげ、知識や技能を習得し、思考・判断・表現しようとしているかといった意思的な側面を捉える評価として進めていくこと

- ④ 毎回の授業で全ての観点から学習評価を行うのではなく、単元や題材等の内容や時間のまとまりの中でトータルな視点から組織的・計画的に学習評価を行うこと
- ⑤ 観点別学習状況の評価では十分に示されない内容は、日々の教育活動や総合所見を通じて積極的に児童生徒に伝えること
- ⑥ 学校全体で学習評価の改善に組織的に取り組む体制づくりが必要であること
- ⑦ 資質・能力のバランスのとれた学習評価を行っていくためには、多種・多様で多角的・多面的な評価を行うことや、診断的評価、形成的評価、総括的評価を適切なタイミングや方法で行うこと
- ⑧ 教科等の特質に応じて、児童生徒が自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったりするために、児童生徒自身による自己評価を学習活動の一環として位置付けること
- ⑨ 教員一人一人が児童生徒の学習の質を捉えることができるよう、研修の充実を図っていくこと
- ⑩ 多様な評価の充実普及など、今後の専門的な検討については、本答申の考え方を前提として行われる必要があること

子供たちにどういった力が身についたのかという学習の成果を捉えるためには、学習評価の在り方が極めて重要になり、これまでの学習評価を見直していく必要があります。そのためには、これらの10の提言を基に新学習指導要領の改訂がなされたことを踏まえて、学習評価に関する新たな視点を実際の授業に導入していくことが大切になります。具体的には、上記の提言①に示されるように、目標に準拠した評価を実質化するために育成を目指す資質・能力の三つの柱と関連した「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の三観点から観点別学習状況の評価を進めることが重要になります。観点別学習状況の評価を充実させることは、目標や指導方法、手立ての妥当性、信頼性を意識した授業改善につながり、学習指導に関わるPDCAサイクルを組織的・体系的に実施し、教育課程の改善に結び付けていくことが可能となります。今後は、特別支援学校において、今ある授業を振り返り、新しい時代に必要な育成すべき資質・能力は何かを考えていく必要があります。

平成29・30年度 特別支援教育部の共同研究



研究テーマ 「知的障害教育における主体的・対話的で深い学びに関する研究」

新学習指導要領で示されている「主体的・対話的で深い学び」をどう捉えるのか、授業改善とどのように結び付けていくのかを明らかにしていく予定です。具体的な例等も紹介します。今後、御協力をお願いすることもあると思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。

コラム

音楽の不思議

先日、県立岡山南支援学校で、九州女子短期大学山田俊之特任教授による音楽の授業があった。山田先生は、ボディパーカッションを取り入れた授業を師範された。小学部・中学部の子どもたちと授業直前に初対面で出会うという極めて心配な環境で授業は始まった。この人は誰？きょとんとする子供も少なくなかった。しかし、山田先生がドラムをたたき始めた時から、「山田先生」と「子どもたち」が繋がった。それは、子どもがその子なりに「山田先生に注目した瞬間」だった。そこには、本物の音楽があり、身体に響く素晴らしい音の集まりが子どもたちを振り向かせた。寝転んで教室の後方を見ていた子どもが振り返った。そこから、授業はまさに山田マジックにかかったようだった。よい授業を作る前提の一つに、関係性をもつことが極めて重要だが、そこには数分で音楽のとりこになる子どもたちが次々と現れた。「この時間は、なんだか楽しそうだな」と思えたのかもしれない。



音楽は障害や病気を越える不思議な魅力がある。それは、コミュニケーションの苦手な子どもたちにも心の扉を開くことができるのではないかといい期待を抱かせる。

山田先生の授業には視覚支援も見通しをもたせる手立ても存在しなかった。音楽のもつダイナミックさに自由に自分を表現できる心を解放され、身体の奥の内臓にまで響く、デジタル音ではない生の音を身体全体で感じ取り、イヤマフを外し音楽の授業に参加する子どもたち。いったい何が起きているのだろう。

かつて、自分が関わったことのある音楽の授業でも同じことが起こっていた。大音響で流れるQUE ENの「we will lock you」に合わせてのリズム打ちや身体表現。「シンバルマーチ」の合奏練習では、一つの教室でシンバル、大太鼓、小太鼓、キーボード、ピアノ・・・決して心地よいとは思えない数々の音が混ざり合い耳をふさぎたくなるが、そこに耳をふさぐ生徒は一人もいない。なぜなのか。そこに何が起きているのか。音楽の授業が終わった途端、生徒がイヤマフを付けたのはなぜなのか。

事実として、T1の先生とT2～数名の先生が、26人の生徒の目標・手立てを詳細に立て、チームとしての動きを綿密に打合せたことは記憶している。実際の授業では、中学校から転勤した音楽未経験の先生たちがなぜか音楽を好きになり、リズムを刻んだこともない理科の先生がタクトを振り、授業を進めていた。これも、T1の先生の緻密な計算による誘導であったのかもしれない。

確かに言えることは、子どもたちがそれぞれ自分らしく精一杯主体的に学ぼうとするエネルギーに満ち溢れていたこと。この授業の分析をしておけばよかったと後悔している。今でも時々、あの授業の光景が思い出される。教師は、うまくいった授業の分析をすることに慣れていない。しかし、これからの主体的・対話的で深い学びを実現していくためのヒントは良い授業にこそ存在していると思う。(特別支援教育部長)

